

続・佐賀越の民俗誌―潮汲みの祭事の道―

武内 文治

1、はじめに

2018年8月に奥四万十山の暮らし調査団（武内文治代表）が四万十町打井川地区の「佐賀越」の古道調査を実施した。前近代の海と山との交易を調査する高知県立歴史民俗資料館の目良裕昭調査員の提案により、現地での聞き取り調査を第1弾として行った。そのレポートは『地域資料叢書 18 続・土佐の地名を歩く―高知県地域史研究論集 I―』（2019年）に掲載しているが詳細内容はホームページ「四万十町地名辞典」

(<https://www.shimanto-chimei.com/>) を参照していただきたい。ここには目良裕昭、楠瀬慶太の両名から「山村・峠を歩く」というテーマで2本の論考を寄せている。

目良裕昭「土佐上山氏の支配領域とその構造」は、史料が少なく研究の進んでいない中世の上山郷の領主の支配形態を『長宗我部地検帳』と「棟札」をもとに検証を加えた意欲作。楠瀬慶太「佐賀越の民俗誌―四万十町奥打井川～黒潮町佐賀間の古道を歩く」は、時代の変化とともに忘れられつつある古道の交通・流通の歴史を地元の古老とともに現地を歩きながら聞き取り調査を進めたフィールドワークの演習作である。楠瀬は「佐賀越は伊与木郷と上山郷を結ぶ第一級の“流通の道”であり“軍事の道”、“信仰の道”でもある」と述べ、「佐賀越の古道（峠道）を介して山村―農村―海村―都市がつながる“海山経済圏”とも言える経済流通圏が機能していたことが想定できる」と経済史的視点で交通網が整備されていない社会においての“峠道”の役割を検証したものである。

今回は第2弾として、上山郷の熊野神社（四万十町大正字ウログチ上鎮座）から佐賀越の古道をとおり伊与喜郷（黒潮町佐賀・熊野浦）へ向かう「潮汲みの祭事の道」を歩いてみた。年に一度のこの行事は上山郷の熊野神社が秋の例祭（11月12日）に行われる。片道35km余りのみちのりを歩き「地名」をなぞりながら当時の景観を復元しようとするものである。

2、清浄人

上山郷の熊野神社では、夏と秋の大祭のときに神事に仕え祭事の準備をする人を「清浄人（じょうじゅうど）」という。六根清浄の「清浄」をうけた者が祭事に従事するといった意味と思われる。大祭の前にはかならず宮司による「禊祓（みそぎはらい）」の儀式があり、清浄人を清める行為から祭事の準備が始められる。現在の清浄人は門脇広明（大正大奈路）と沖俊憲（大正北ノ川）の2人で、その役割は、潮汲みに備えて竹筒を設え、大注連縄を綯い、餅を搗



熊野浦で潮汲みする清浄人

き、神前の供え物を揃え、牛鬼や神輿の飾りつけをし、霜月晦日の正月飾りを整えるなど神職ではないが宮司を支える在家の社人といったところだろう。『南路志』の若一王子宮（香南市香我美町徳王子鎮座）の段に「祭三度ノ神祭、兼日より社人宮籠仕清浄ニ相改、當日卯刻烏喰之御供上申御神楽仕也」（2巻p162）とあり烏喰の儀式に仕える者として「社人宮籠仕清浄ニ相改」と書かれている。また『十和村史』には「星神社の清浄人は四万十川で水垢離をとって祭日3日前から宮に籠り、その仕事は神社の清掃、注連飾りなどであるが、最も重要なのは神饌の調達であり、餅搗きである。従って祭典で神饌に触れることを許されるのも清浄人に限られる」（p1050）と清浄人の役割を述べている。星神社の古式神事には清浄人とともに精進人と呼ばれるものもでてくる。いずれにしても、神職ではない在家の者が禊祓をうけ神社に籠って穢れを断つことによって、神饌等の重要な祭祀に従事することができるとしたものだだろう。旧十和村奥大道の天神宮では水行で浄め白装束に袴のいでたちで祭事に仕える清浄人が一人、くじで指名されるという。



霜月晦日の正月飾りを作る清浄人

山本ひろ子の『変成譜—中世神仏習合の世界』（講談社学術文庫、2018年）には垢離のための浄水を汲む男として「垢離小男（こりさお）」と呼んでいる。聖なる水を管理して浄祓儀礼の基盤を支え熊野権現に仕える男の神子である。古来より「水」は命そのもので、水を取り扱うものに尊敬の念を込めて呼称されたものであろう。上山郷の熊野神社では、清浄人とも浄汲人とも記録されている。

この潮汲みの路程の途中、奥打井川地区に清浄人が一晩泊まる「塩の宿」がある。今はだれも住んでいないが入口には常夜燈がありその石に「塩ノ宿 郷社熊野神社清浄人（しょうじゅうどう）ノ宿」と刻まれている。「しょうじょうど」が「しょうじゅうど」に音の転訛があったものと思われる。その隣の説明板には「浄汲人の宿 熊野神社の大祭の前日、塩ごり汲みの使いが、打井川を通り、地蔵峠を越えて、佐賀の熊の浦で竹筒に塩水を汲み再び地蔵峠を帰るとき、ふもとの秋田家（常宿）に一泊してその夜は酒肴で大変なもてなしをうけ、翌早朝に熊野神社に帰り奉納した」とまぎらわしく“浄汲人”と書かれている。詳しくは『大正のむかし話』に塩の宿の主人である秋田重保が話者として「清浄人の宿」を語っているので参考にされたい。

清浄人、精進人、浄汲人と色々と呼ばれているが、山本ひろ子の言う「こりさお」と同じく「浄められた潮を汲む人」といったことだろう。ここでは「清浄人」として話を進める。

秋の大祭は11月12日である。清浄人は11月9日に潮汲みのための竹筒を設えるた

め、直会殿の西側に自生する竹を取り下部に節部を残し20cm位の長さで切り揃え上部にキリで穴をあけ、その穴に棕櫚の葉を縦に裂き葉脈を繊維とした紐を輪にとおしてつくる。事前に作った竹筒は14本である。潮水の竹筒を置く場所は次の13カ所である。『佐賀町農民史』には容器50本とあることから、昔は浄める箇所は多かったのだろう。熊乃屋（山本友明の先祖）は田辺湛増が上陸した際にお供をしていたものとも書かれている。

①熊乃屋の軒下（黒潮町佐賀）

②熊野神社・一の鳥居（右）

③熊野神社・一の鳥居（左）

④熊野神社・直会殿

⑤熊野神社・社務所

⑥熊野神社・御蔵

⑦熊野神社・御札授与所

⑧熊野神社・拝殿入口（右）

⑨熊野神社・拝殿入口（左）

⑩熊野神社・拝殿奥（右）

⑪熊野神社・拝殿奥（左）

⑫熊野神社・本殿（右）

⑬熊野神社・本殿（左）



竹筒の準備が整えば神殿に捧げ、宮司は清浄人を禊払いして、直会となる。

2019年の潮汲みの祭事で清浄人の門脇に同行した。今では軽トラックで移動する潮汲みとなっている。熊野浦での祭事の前に、門脇清浄人は熊野神社の正式の祭事行為ではないが略拝詞とともに般若心経を唱えて潮汲みの儀式を行う。般若心経は神には宝の御経、仏には花の御経、人には祈祷の御経として神仏問わず読み上げられるという。潮のさし初めが過ぎると海に入り、竹筒に海水を入れ磯草で栓をする。13本すべて準備するとひとまとめに束ねる。帰途には、雄松（黒松）・ウラジロ・ユズリハなどを調達し霜月晦日に行われる熊野神社特有の正月行事の仕込みも行った。今では熊乃屋も閉じられて誰もいないが「熊乃屋」と書かれた門灯の横に習わしにより、今年の竹筒を新しい竹筒一つに取り換える。残りの竹筒を熊野神社にまで運び神前に一旦供えることになる。これが潮汲み祭事に関する清浄人の役目である。

3、潮汲み祭事の道を歩いて

勧請の由来にある800年前、「熊野三千六百峰」と呼ばれる熊野に似た面影をこの上山郷に求めた。潮汲み祭事はその望郷の地に馳せる思いを伝承するために年に一度のルーティンワークとして繰り返されたのではない。

この潮汲み祭事の道については『地域資料叢書 18 続・土佐の地名を歩く―高知県地域史研究論集Ⅰ―』で報告したとおり打井川の権現石から塩の宿まで現地を踏査したが夏場

のため峠越えを断念した経緯がある。今回はその第2弾として、上山郷の熊野神社から伊与喜郷の熊野浦まで全踏破するものである。途中の集落についてそれぞれ項を立て、大地に刻まれた地名が語る過去の記憶、中世の景観を復元することを試み、また、今回の道程として【道中記】を道草話として記録した。

歩くにあたっては熊野の修験者の装束をまね、白装束・金剛杖・錫杖・珠数を整えた出で立ちで、熊野神社から熊野浦までの道すがら天地草木に祈りをささげ、ひと昔の清浄人の振舞いを思いつつ足を進めた。

▼ 田野々 (たのの/ 33.192129, 132.971799)

上山郷統治の要
となるところが

「田野々」で四十
十川の最大支流の
梶原川との合流点
に集落が形成され
ている。その集落
は穿入蛇行による



昭和36年の田野々全景（中央が亀の森。左奥に熊野神社）

旧河床となったところにあり、還流丘陵となった小高い台地は「亀の森」と呼ばれる。熊野神社の神宮寺も宝亀山長楽寺（本殿の東隣に所在）であり、上山領主の菩提寺である五松寺の山号も萬亀山である。熊野の本宮では、亀は尾から油を出すことから「油戸」と呼ばれ、参拝後の下向に欠かせない牛玉宝印と椰木の葉を頂く特殊な場所を言うそう。丁度、熊野神社が鎮座する位置は亀の森の南の端で亀の尾にあたる。そう広くもない田畑が広がるところではあるが、「六月田」「要次田」「門田」「九日田」「池田」「寺田」と多くの田を付す字名がある。『長宗我部地検帳』にも「ワウトシテン（大歳田）」「五月田」のホノギがあり神社の年中行事にあてた神田がたくさんあったことを物語っている。

高知新聞夕刊（2007年9月25日付）の『土佐地名往来』（片岡雅文記者の連載コラム）に田野々が紹介されていた。「大正町史・資料編」には、田野々村は中央に丘陵（森駄場※亀の森）を残し、旧河道跡に平地が開けた地名であり、地名の“たのの”は“たなの”がなまり変わった言葉で、段丘のある開き地に由来するといわれている」と述べている。

棚+の（助詞）+野と解釈したのだろうが、「田野々」地名は梶原町田野々、南国市奈路・田野々、徳島県三好市田野々、香川県観音寺市田野々と四国に見受けられるが熊野にも和歌山県古座川町三尾川には古座川に架る田野々橋（田野々集落）があり、熊野市育生町長井にも田野々集落がある。それより不思議なのは「○野々」の地名をよくみかける。四十町内には「野々川」や「神野々」、「古味野々」があり、近くには「市

野々川（黒潮町）」や「姫野々（津野町）」、「鍵野々（津野町）」、「宮野々（中土佐町）」、「槇野々（中土佐町）」がある。「田」と「野々」と2つに分けてみたら、田でなく「野々」に地名の意味があるのではと考える。近郊の「○野々」の前にくる「市」や「姫」や「宮」や「槇」も神仏に関連する用語である。『高知県方言辞典』にも「の一の一さん」の項に「【幼】神様・仏様。梶原・中土佐・窪川」とある。楠原佑介・溝手理太郎編『地名用語語源辞典』（1983年）では「巫女に関する地名か。信州では巫女をノノというこ」とある。巫女研究の第一人者の中山太郎が「信州の北部では巫女をノノーといっているのに反して、南部ではイチイといっているという」（中山太郎『日本巫女史』2012年（p270））というのを引用したのだろう。ノウノウが単なる幼児言葉や方言だけでは説明できない古い言葉のようである。また「タ」の意味であるが『民俗地名語彙辞典』ではタの項で「平の意で、耕作用地の意に用いられる。ヘタ（辺）、ハタ（端）のタ、遠近を表すアナタ、コナタのタがあり、場所を表すタがある」と説明している。

大正地域には、縄文遺跡はあるが弥生遺跡はまだ見つかっていない。農地も少なくその大部分は山林であるが、田野々は河川の合流点として開けた土地。熊野浦から市野々をとおり、上山郷に入ってきたことを熊野神社と関連付けて、「平坦な神領地」と推理する。

【道中記】12月24日冬の朝6時は朝まだき。修験者の装束を真似してきたので出立の儀式として持ってきた『修験道行者諸経要集』の般若心経を読もうと思ったが暗くて読めない。吉野大峰山へ新客として2度行っただけなので暗唱もできない。とりあえず五百五十五円の賽銭を入れ道中安全の祈願をした。境内の防犯カメラが不審者として撮られていたらいけないので田辺官司への挨拶がてらカメラに一礼をしてスタート。中村まで歩いたことは何度もあるので距離的には何ら問題はなかったが、国土地理院の地形図にある山道を示す破線が頼みの初めての道。それだけが不安である。歩道を歩いたがこの早朝でもさすが国道で車の往来がある。ちょっと恥ずかしいので頭に巻いた白手拭を深く結びなおした。寒いので速足だ。人家のないところでは錫杖を鳴らし金剛杖を大きく振って歩いた。大ジイの瀬音が響く。もうすぐ轟崎である。（6：13）

▼ 轟崎（とどろぎ/33.182773, 132.971585）

轟（とどろ）は全国に分布する水音からきた地形地名。四万十町でも轟の上（浦越地区）、轟（昭和地区の集落）がある。中村には百笑（どうめき）の難読地名がある。トドの音は十と十で百、どよめき笑う意味だという。大正中津川の成川（なるかわ）や奥打井川の鳴川（なるかわ）もこの類で川が暮らしに寄りそっていることがうかがえる。この轟崎は大字大正（旧田野々）の一部ではあるが『長宗我部地検帳』でもトトロサキ村として枝村の名が記されている。大きく蛇行する1kmも満たない轟崎の流域にこの川

一番とも思える瀬里轟や大ジイの二段瀬などがあり 10m以上も落差を生むことから命名された「轟崎」地名である。

この瀬里轟の上流に J R 予土線のトラス橋がありその鉄骨には「仁井田川橋梁」と書かれている。田野々で梶原川（江戸期の名称は津野山川。当時はこちらが本流であった）を合流した四万十川の名称もいろいろと変遷しているが仁井田川は昭和の 40 年代くらいまで使われた名称である。J R 予土線（建設中は窪江線と呼ばれた）が全線開通したのは昭和 49 年（1974）、戦後の渡川電源開発計画に瀬里ダム計画があったため工事が中断し遅れることになった。そんな古い計画であったため当時の公称河川名により仁井田川橋梁と橋名を刻んだのだろう。

『高知県管内地図』のうち大正 12 年（1923）発行、昭和 6 年（1931）発行ともに「仁井田川」とある。それ以前の明治 27 年（1894）発行の『高知県管内全図』では「上山川」と記されている。渡川か四万十川かの論争はあるが、水系の名称は今でも渡川水系であり本流の名称だけ四万十川と変更したことになる。昔から今に至るまで地元の住民同士は「大川」と呼んでいる。



高知県管内全図（1894 年）

【道中記】国道 381 号と国道 439 号が交差するところが轟崎である。ここには道の駅「四万十大正」がある。今ではどこにもあり全国 1160 駅が登録されているが、その先駆けが道の駅「四万十大正」である。平成 5 年（1993）4 月に第一次分として全国 103 カ所設置・登録された一つという。J A 婦人部が営業していた小さなうどんの店「であいの里」が武内一町長の「新しもん好きの大正」気質故に大化けしたものだ。寒さから早速トイレとなった。「缶ビールを列車の窓に立てて 遠ざかる山を見ながら君のもとに帰る・・・」とさとう宗幸が歌う有名なミュージックトイレだ。栃木訛りで朴訥と語る立松和平の作詞である。時刻表を携えて青春 18 キップを握りしめた貧乏自由気ままな鉄道旅。今やトレンドな旅姿といわれるが歩く旅がもっとトレンド。しんどくても歩くことは修行なのだと自分に言い聞かせる。（6 : 26/1.2 km）

▼ 瀬里（せり/33.180556, 132.98402）

地検帳のホノギにも「セリ谷」とある。植物地名のセリが多く採取できる土地を指しているのかもしれない。土佐方言でセリヤイとかセリコセリコするとか体を押し合うさまを「セル」という。狭まった地形地名に「セト」がある。左右両岸ともに通行できないような所をセト・セドというのは関東以西にある地形地名で瀬戸際のセトである。狭

まった地形のセル・セトがセリに転化し轟崎境となるこの地を「セリトドロ（瀬里轟）」と呼ぶようになったのではなかろうか。当時の木材の搬送は筏で流すのが主流であった。命がけの仕事である筏師は流材の難所にトドロやセリの地名を刻んできたのだろう。

今村理則は「天竜川の新田と筏」(『地名と風土』10号、2016年)で天竜川流域に刻まれた材木の運搬にかかわる小字を述べ「セリは巨岩に激流があたって渦巻くところをいう」と書いている。

いずれにしても「狭隘な地」をイメージした地名ではあるが、小さな集落にしてはガソリンスタンドもあり、四万十森林組合の集成材工場もある。

【道中記】瀬里轟周辺の景観が一番好きだ。国道の対岸にはリバーパーク轟というキャンプ場がある。利用客が少ないから一人キャンプには絶好のロケーションである。入口で500円を箱に入れる良心市方式の無人施設であるが、トイレも炊事棟も整備されている。見える範囲に人家はないが、瀬里轟の瀑音と時折鉄橋をわたる列車のガタゴトが寂しさを吹き飛ばす。秋には川面のむこうに紅葉が映え、なかでも台湾フーが林立する黄葉も圧巻だ。春の桜並木と桜マラソンも撮影ポイントだ。川霧の中を窪川発6時22分の一番列車がとおる。川奥信号所から江川崎までの鉄路は高規格路線で四万十川沿いを走る鉄っちゃん人気の路線だが、営業係数は1159と四国では最も悪い。去年は竹の子が列車を止めたとYouTubeで人気となった。川向の鉄路を走る音がこちよい歩くリズムを刻んでくれる。(6:44/2.9km)

▼ 四手ノ川（しでのかわ/[33.183357](#), [132.990618](#))

今は希ノ川という。平成の合併による四万十町の発足に合わせ、四手ノ川地区の総意で、地区の名称を希ノ川に改めることとなった。

ひとつには、隣の十和村が「昭和の合併」時、大字名称の「四手」を「昭和」に改めたように、シデの音が死出(死んであの世へ行く)に通じることから忌み嫌ったのだろう。大字名称は変わったが四手峠や四手崎の地名は残っている。当地に流れる四手ノ川の河川名称も残っている。四万十川に架る橋の橋名板にも四手ノ川橋と刻まれている。この「シデ」の音のある地名は全国にあり、当町にも五社さん(高岡神社)が鎮座する仕出原(しではら)がある。

「四手ノ川」の地名の由来は、二つに谷が分かれる地形が御幣に挟む紙垂(四手)に似ているか、シデの木が群生していた土地であったことによるかと思っていた。窪川の五社さんが鎮座する仕出原の「仕出」は「紙垂(しで)」を由来とするという。『高知県方言辞典』には「シデ：神儀の四手(垂)。しめなわ、または玉串などにつけて垂らす紙をいう。」とある。また幡多の方言で「つちを叩き固めるへの字型の木の棒」をシデとも書いてある。シデ(四手・横)の木はカバノキ科クマシデ属の総称で落葉広葉樹。

この木の花が紙垂に似ていることから和名となった。四手ノ川流域を GoogleEarth で俯瞰すれば、地形が御幣に挟む紙垂（四手）に似ていると実感する。

四万十町広報誌『四万十町通信』67 号は「集落を千手観音の手のように幾筋もの谷が流れていることから“四方に千手＝四手ノ川”と言ったのだろう」と書かれている。中世にこのような合名手法があったとは思えないが、いずれにしても上山郷はどの谷筋も「千手観音」のようであり、シデの木の由来にしても地形地名であることは確かなようだ。

戦国末期の『長宗我部地検帳』にも残る歴史のある四手ノ川の地名を希ノ川に改めた理由は判然としないが、高知新聞連載コラム『土佐地名往来』No614 では「その（四手ノ川）古来の地名をあえて捨てたのは、地元の人たちの意思。若い人にも帰ってきてもらいたい。そんな希望の持てる集落に」と地元の声を載せ「切実な願いのこもった地名」として「希ノ川」を好意的に紹介している。営々とそこに暮らし使ってきた 400 年を超える歴史ある地名を今風の希望に託した思いが大規模風力発電の建設となるのだけは勘弁願いたい。

【道中記】四万十川の特徴である穿入蛇行の流れもここらあたりは真っすぐで桜並木も来春の桜マラソンを待ちわびている。四手ノ川橋を渡ると木樽の側の部材をつくる味元製材があり、四手ノ川に進むと柚オイルやヒノキオイルを抽出するエコロジー四万十の工場がある。この側部材をつくる工場は日本に二か所しかないというし、オイルの抽出にしてもニッチな産業分野である。阪本順治監督の第 2 作目の映画『鉄拳』の舞台となったのが四手ノ川。町有林の中にリングのセットを作っていたが今もあるだろうか。 (6 : 53/3.6 km)

▼ 下岡（しもおか/33.182675, 133.00375)

『四万十町史・資料編』には「仁井田川に北からの下岡川が合流する右岸の山間地域で上山郷上分の一村。下岡の地名は下流にある河岸段丘の意といわれる」（p 43）とある。隣の上岡地区と対となる地名だ。

その「岡」だが、「丘」に遅れてやっと平成 29 年度（2019）から常用漢字となったという。『字源辞典・字統』によると『丘』は象形文字で「土の高きものなり。人の為る所に非ざるなり。四方高く、中央下きを丘となす」とあり、墳丘の象形である丘は丘墳に関する語が多いとある。かたや『岡』は会意（文字の複合）で岡に火を加えて、高熱で焼成するものを岡といい、赤土色の焼き固められた鋳型というのが原義とある。上岡川の上流域の番上（ばんじょう）に坑道跡がある。戦前アンチモン鉱山であったという。中世以前にも何らかの鉱山があり溶融する「岡」があったと想起する。ちなみに下岡の産土神は金津風呂神社（かねつぶろじんじゃ）で、祭神は金山彦命である。イザナミの嘔吐物が化身した神で、鉄や銅を溶かした状態が似ていることから鍛冶・鉄鋼の神として「金山彦命」として祀られる。「津」は処、「風呂」は洞（坑道）が転訛したもの

ではないか。

また、田野々の産土神は河内神社で潮汲みのルート沿いの轟崎、瀬里、上岡、口打井川、奥打井川と沿道すべての産土神は河内神社である。『長宗我部地検帳』には下岡村とあるがそれ以前は上岡と下岡は一つの村で何らかの事情により分村され新たに産土神を祭ることになったと推考する。

【道中記】下岡に近づくと最初に下岡の産土神が国道沿い鎮座する。金津風呂神社である。『高知県土佐国神社明細帳』（以下『神社明細帳』）に記載されている5624社に風呂の字を付す神社はここだけだ。少し足を進めると自然酵母のパン屋さん「麦の穂」がある。パン屋と豆腐屋は朝の代名詞だ。明かりは灯っているが開店はまだで昼飯の思いが叶わなかった。

(7:07/5.0km)

▼ 上岡（かみおか/33.181364, 133.01156）

上岡の「岡」は下岡と同じように、地形用語としては陸の意味ではある。地面が高くて水のあたりが悪い所をいう地方もある。

『民俗地名語彙辞典』には、岡に傍すじの意味があるとして「岡場所（非公認の遊郭）」、「岡目八目（第三者の対戦者）」、「岡っ引き（同心の個人関係。非公式な捜査機関）」の例を示し「岡」は、「脇」「外」を表す言葉であると述べている。また、新潟県では鉱山仕事のシキに対する語として「岡仕事」といえば鉱外労働のことを指すという。上岡のアンチモン鉱山といい、下岡の金津風呂神社といい、何やら鉱山の匂いのする「岡」である。

『大正町史』では「上流にある河岸段丘」と上岡の地名由来を字づらのみで説明する。



向山沈下橋

【道中記】上岡は祖母の出里。家は対岸にあり沈下橋を渡って行ったことがある。その沈下橋の正式な名称は「向山沈下橋」だが誰もが上岡沈下橋という。上岡集落は中組・奥組・向山の三班に分かれているが四万十川の対岸（左岸）の班が向山である。この沈下橋はアールヌーボー調の洗練されたデザインと機能性が特徴で沈下橋でも最高位と思っている。設計者は役場職員の武内敏博と聞いたことがある。NHK「にっぽん縦断こころ旅」にも登場した沈下橋だ。橋の命名もいい。昨今「なかよし橋」だの「鮎おどり橋」などおちゃらけた命名（命名者は真剣だろうが）が気になる。昔は橋が架かることにより利便を享受する地域の側に立った命名であった。上岡沈下橋でなく向山沈下橋。相手の立場に立った思いやりの橋名である。

(7:18/5.9km)

▼ 口打井川（くちうついがわ/33.176631, 133.031044）

『長宗我部地検帳』には「宇津井川村」とある。『土佐州郡誌』は「打井川村」となり『南路志』では先祖返りして「宇津井川村」となっている。集落の中央を打井川（全長約 8.5 km）が北西に流れ四万十川に合流する。この合流点の集落が口打井川であり、そこに鎮座する産土の神が河内神社である。打井川には 2 つの河内神社があり、口打井川宮ノ脇鎮座の河内神社は「打井川村ノ産土神ニテ元ト河内大明神。旧社格村社」とあり、奥打井川宮ノ奈路鎮座の河内神社は「打井川村ノ内奥分部落産土神ト尊祭シ元ト河内大明神。旧社格無各社」と『神社明細帳』に記している。大字名は打井川であるが、現在の行政区は口打井川・中打井川・奥打井川の 3 つの集落に分れている。寛政六甲寅年（1794）の棟札によると口宇津井川村と記してあることから、明治以前は口（下分）と奥（奥分）の 2 つに分けていたようである。



歩き始めた田野々の産土神が河内神社で、潮汲みの古道に沿いに河内神社が轟崎、瀬里、上岡、打井川と鎮座する。佐賀越を下った市野々も河内神社が産土の神である。気になって『神社明細帳』の河内系神社を調べると、記録された河内神社、川内神社、川之内神社、八社川内神社、八所河内神社、六社川内神社、川内八所神社、河内五社神社、惣河内神社の神社名が合計で 136 社みられる。鎮座地で県内分布をみると、郡域（市は旧郡域に含む）では安芸郡 10 社、香美郡 1 社、長岡郡 3 社、土佐郡 29 社、吾川郡 14 社、高岡郡 40 社、幡多郡 39 社と西高東低となる。流域では、四万十川流域 73 社、吉野川流域 19 社、仁淀川流域 17 社、鏡川流域 12 社、伊与木川流域 5 社と圧倒的に四万十川流域が多くなる。市町村別では、四万十町 42 社（窪川 16・大正 13・十和 13）、土佐町 14 社、高知市 12 社、津野町 10 社、いの町 9 社となる。

『十和村史』の考古編は岡本健児が「河内神社考」の章を立て、十和村の河内神社 13 社について述べるとともに県内の分布について南路志を使って述べている。岡本は「古代における河神・水神信仰は、中世ないしそれ以前において、下流では木船・神母信仰に、上流の河谷平野では河内信仰に変化するのではないかと考える」（p 123）と高知県の神道考古学の第一人者として論考を進めている。

潮汲みの古道に沿う河内神社は、四万十川中流域とともに伊与喜郷（黒潮町佐賀地域）の伊与木川流域にも分布する。このことは岡本のいう「河の神を祭る原始神道の流れ」とともに古代から佐賀越の往来の証左でもあると考える。

この地区名の「打井川」であるが、打井川地区には一軒もない「打井」の姓が、潮汲

みの古道の地蔵峠（佐賀越）を越える市野々地区には数件ある。苗字の90%は地名から名づけられると言われる。多賀一造編『大正のむかし話』の「打井川の始まり」（p148）に詳しく書かれている。江戸期の墓をみると「宇津井」から「討井」に変わり、明治になって今の「打井」になったとある。現在、打井川には打井や宇津井の姓はないとある。

それでは「打井」とは何か。高知新聞連載コラム『土佐地名往来』No293では打井川の由来について地形を表す語“うつ”にあるとして「険しい山々に挟まれた凹状の地形を“うつ”と言い、そのあいだを流れる川を“うついがわ”と呼んだ。」と打井川の由来を紹介している。「奥深い谷川」をウツというなら、土佐の山間はウツだらけになってしまう。また、「ウツ」の地形地名の説明はあるが、「イ」の説明がされていないのが不自然でもある。『民俗地名語彙辞典』はイの説明にとして「②たんにイを表わす表音文字として使われる。向の向井、境の坂井、酒井になるのもこの例」とある。その解釈からウツだけの説明となったのかもしれない。ただ、イは水利用の地名として大地に刻まれている大切な言葉。水は日常の暮らしと水田にとって必須であり、その利用が地名として命名され、新田開発と灌漑技術の向上とともに地名も変化してきた。イは井であり、泉、井戸、用水溝、水路、井堰のことで新井・井の頭・井上・井関の地名がある。ウツとイを合わせて解釈してみたがどうもうまくまとまらないので次の機会とする。

【道中記】上岡を過ぎて上宮の大曲までの2kmの国道381号沿いは、四万十川の特徴的な穿入蛇行の景観から一変する直線である。強い風が通り抜けるだけでなく車も高速道路並みに突っ走る。四万十川を渡るとそこはJR打井川駅で、近くに大きな看板「海洋堂ホビー館」がある。キャッチコピーが「へんぴなミュージアム」と自虐的ではあるが、館のなかに入ればカタロニア船がお客を迎えてくれる。有名造形師たちの恐竜から美少女まで展示される世界的なフィギアメーカー海洋堂の軌跡とコレクションのミュージアムである。駅から歩いて1時間。のんびり歩くのも四万十時間だ。（7:44/7.9km）

▼ 奥打井川（おくうついがわ/33.152957, 133.045431）

奥打井川は名のとおり、奥深く狭い谷川をこれでもかというくらい入っていかなければならない。その谷筋に人家が点在する。地域の姓の多くは「秋田」で、そのためか家ごとに屋号が残っていて今でも使われるという。奥打井川集落の下流域から屋号を並べてみると「シタコバタ」「ウエコバタ」「キョウデン」「ナカヤシキ」「テランコイ」「下ボリ」「中ボリ」「上ボリ」「ヤカ」「ナラシ」「ドン



奥打井川河内神社の花取踊り

ガ」「ヒクガク」「カンダバ」「シンヤ」「イヌダバ」「アバタ」「マツバガバ」「ウマハタ」「シntax」「オタカヘヤ」と呪文を唱えているようだ。

打井川の字名に「コウゲ」や「シガキ」がある。『総合日本民俗語彙』によると「コウゲ 四国の愛媛から中国地方に広く使われる語彙。多くは短い草の生えた土地で、水田はもとより畑にも開き難い所。それ故にしばしば芝の字が宛てられている」とある。シガキについては「猟をするとき身を隠す場所。鹿や猪のよく通る道筋で待ち構えるのに都合のいいところ」の意味で、山口、福岡、長崎、鹿児島、高知など西日本の地名と『民俗地名語彙辞典』は説明する。狭隘な土地に田畑は少なく、焼畑や狩猟が生活を支える重要な産業であったことだろう。戦後の南米移住では村の助役がパラグアイ開拓団の団長になり多くの打井川の次男三男が参加した。旧大正町にはこの南米開拓団の史資料が大切に保存されている。



かっぱ館

中打井川の集落を過ぎ、「そうざき半島」の橋を渡る手前にかっぱ館< <http://ksmv.jp/kappakan/> >があり、奥打井川には旧打井川小学校体育館を活用したホビー館< <http://ksmv.jp/hobbykan/> >がある。海洋堂の創設者・宮脇修氏の斬新なアイデアと行動力をエネルギーにして人から人へと「自然パーク構想」を広布して、へんぴなこの地に2つのミュージアムを創り上げた。

かっぱ館の谷を奥に進めば「馬之助神社」がある。ホビー館を奥に進めば「道文神社」がある。

【道中記】奥打井川のホビー館にむけて、県道の改良が進む。なかでも、かっぱ館を見下ろしながら、2度連続して潜入蛇行する打井川に橋が2つ架る。数年前までは「そうざき半島」とよばれる農家民宿があった。橋の上から眺めるとこれが「半島」と呼ばれる所以かとわかる。メルヘンチックなかっぱ館の景観とその谷奥にある「馬之助神社」。この2つを訪ねれば妖気漂う土地の気を感じることができる。ここから、20分歩けばホビー館となる。開館時刻にはまだ時間があるので「たにんごや」という休憩所で自販機のホットココアを飲みながら一服した。遠くでチェーンソーの音がする。ここから「鳥打場越え」にむかう県道の分かれとなる大平橋、少し行って「権現様の休み石」まで20分程度だ。「大平橋」の手前に潜入蛇行する内側の丘に17歳の特攻隊員として戦死した山脇林の墓がある。彼と同じ特攻隊であり同級生でもあった私の父からよく話を聞かされた。彼の兄が山脇敏磨で大正村の助役としてパラグアイ開拓団の団長となった人である。詳しくは大西正祐『17歳の特攻隊員』を読んでいただきたい。僻村の宿命は「棄民」なのか、満蒙開拓団、南米移住、ダム開発計画と幾度も故郷を捨てると

いう国策に踊らされた。「自由は土佐の山間より出づ」というがそんなキラキラしたものはこの深い谷間には遠い世界のように思える。明治維新も戦後の復興も兵站基地のように支えたものは貧しい田舎の若者である。いつものとおり小高い丘の墓に手を合わせ、山脇林を偲び合掌。 (9:20/15.0km)

▼ 塩の宿 (しおのやど/33.134991,133.067071)

塩の生産地と内陸奥地へとつなぐ交易道は全国にくつもある。高知県では赤岡の塩田と物部の塩峯公土方神社までを結ぶ「土佐塩の道」は整備されて歩きやすい。塩のみならず海と山の生活物資が行き交う道は昔の往還道である。片道30kmを超える道ではあるが、道のパンフレットもあり、沿線には表示板もあるから迷うことはない。駄賃馬の道でもあることから無理な勾配も少なく、常夜燈や見渡し地蔵や丁塚など昔の往来を感じる地物が今もある。



田野々から佐賀へむかう塩の道は、清浄人が潮汲み祭事に往来する潮の道でもある。この塩の宿は往還道を行き交う人の宿ではなく、清浄人が接待を受ける宿である。今は住む人もいなくて少し荒れてきているが、当日は幟も立てて迎えたという。最後に泊った清浄人は下岡の武政利夫さんだったということだが、遠い昔のことである。

【道中記】大平橋を過ぎると「権現の休石」がある。田那部旦増（熊野別当田辺湛増）が上山郷に入る際、3つの組に分かれてひそかに潜入したという伝承がある。その主たるものがこの打井川越で旅の途中この休み石で休憩したのであろう。「権現様の休石」と名付けられているが旅人が休む場所は峠とか坂の始まりとかで、一服して次に備えるところである。大概、水場があり先の道が見通せる景色のいいところが「休場」となり、地名として刻まれる場合が多い。往来地名には休場のほか、「越（こえ・こし）」、「串（くし）」、「遅越」、「登尾」、「折付」、「渡り上り」、「傍示」「鍵掛」「山口」などが各地に見える。この「塩の宿」のあるところは「下ダバ」、上隣りが「馬ダバ」で下隣りが「栗ダバ」、向いが「松ガダバ」と南予から高知県西部に多い「ダバ」地名である。栗焼酎「ダバダ火振」もこれをヒントにして名付けられた。ここまでの道中、奥打井川の秋田八重子さん（屋号ナラシ）に話を伺った。「田那部旦増が上山郷に入るときお供したものが武内七郎。その末裔となる家が私の実家である田野々の武内で、先祖書もあります。3軒とも先祖書があり、うち一つの武内も塩の宿近くに嫁に来ている。熊野さんの不思議な縁です」とのこと。この「塩の宿」から地蔵峠への登り付きと

なる。その字名も「佐賀道」とある。(9 : 40/16.6 k m)

▼ 地蔵峠 (じぞうとうげ/33.133463, 133.074753)

「峠」は不思議な世界である。

風が変わり、景色が変わる「向こうの世界」がここから始まる。

古来から往来の障壁となるのは大川であり高山である。その高山を越えるためには坂を登らなければならないが、なるべく高度差のない山の鞍部を目指すのが一番である。そこが峠であり、その多くが隣の村との境界にもなっている。ときには分水嶺にもなる「別の世界」の始まりでもある。



右・上山郷と左・伊与喜郷の郷境（奥が地蔵峠）

村人にとっては、罪人や役人を引き継ぐ場所であり、あの世とこの世を結界する祈りの場、災いを止める所でもある。村境として関札も置かれた。十和では大草鞋を置く。

旅人にとっては峠には往来の安全を祈る石や地蔵があり、疲れを癒す湧き水があり茶屋がある。古くは、市もある賑わいの場、風葬をおこなう葬制の場、獣往来の狩猟の場。脱藩の道となる新天地への決意の場・・・などなど「峠」は、なんでもありの「ワンダーランド（おとぎの世界）」である。

この「峠」について服部英雄『峠の歴史学』（朝日選書、2007年）は「数々の峠を結ぶ“道・みち”。人が動き、ものが動く。「道」なくして人々の暮らしも成り立たず、歴史もあり得ない」と延べ、「道」と「峠」を通して歴史の群像を問うている。服部は同書で①通行者のために道を守る側の視点②牛馬の目線の2つの視点でとらえ、峠と古道について、物資交流の道、信仰の道、軍事の道とに分けて各地を案内し探訪へといざなっている。

【道中記】塩の宿から右手に三宝荒神の小高い丘をみながら谷筋の作業道を山に入る。地名では「登尾」が多いが、これから山越えの始まりとなる。林道を少し進むと谷越えとなるところが、山道への入口となる。つづら折れの道を15分くらい登ると名もない峠となる。本当の地蔵峠はその南側であるが、市野々へ降り付くにはここからの尾根筋沿いの道が整備され、国土地理院の地形図にも記載されており迷うことはない。地蔵峠から佐賀への道は作業道が抜かれているため歩く道は寸断され戸惑うし、作業道を歩けば伊与喜川への道となり遠回りとなる。この地蔵峠だが昔話にもでてくる「しゅむか地蔵」もあり、凱旋門もあったという。凱旋門というより歓送門で明治37年というからロシア出兵だろう。旧大正町では5本の歓送門がつくれ、その一つは北ノ川小学校の門柱として今も利用

しているので見れば形が分かる。ここから佐賀港も見えるはずだか今は木が繁り眺望はない。(10 : 10/17.5 km)

▼ 市野々 (いちのの/33.123010, 133.100036)

「イチ」地名について、筒井功『日本の地名』(河出書房新社、2011年)では「イチ(漢字は、ほとんどが市か一)の付く地名は各地におびただしくある。なぜ、こんなに多いかが、まず謎である。(略)市ノ瀬は代表的なイチ地名の一つで、各地にざらに見られる。大部分は深い山中に位置して、市場とのかかわりは想定しにくい。かといって、いくつかある瀬のうちの何番目という意味でもない。(略)イチの語はおそらく“神をあがめる”の意の“斎(いつ)く”のイツと語源を同じくしているのではないか。(略)東北地方で口寄せを業とするイタコ(コは人といったほどの意)、戦前まで各地で見られた祈祷者のイチコ(略)などもみな一種のイチである」(p173~)と、巫女の一形態である土佐の「侘(いつ)」とイチ地名の関係性を述べている。

筒井の別書『葬儀の民俗学』(河出書房新社、2010年)では「16世紀の末ごろイチと呼ばれる一種の宗教者が住んでいた。(略)16世紀末ごろの土佐に、どれくらいの侘がいたのだろうか。領主から給地を与えられていた者については、『長宗我部地検帳』を丹念に繰っていけば、その数は計算できる。(略)おそらく数百人ほどであったろう」と書き、イチの語義を「神と人をつなぐ人のことである」とし「市ノ瀬など各地におびただしい“イチ”の付く地名も多くはおそらく“イチの場”すなわち祭場に由来」(p168)と述べている。民俗研究の一方の雄である中山太郎は『日本巫女史』で侘(いつ)について一箇所のみ「土佐で多くの社に侘と云う者が居るのも、亦是で(中山曰。巫女の意)であろう。其住所を侘屋敷と云ひ、或は男の神主を侘太夫などとも云ふ」(p34)と諸神社録を引用して述べている。

イチの役割について福島義之が『土佐の祭りと文化』(文芸社、2004年)で、「神幸の御案内」(p149)役として、神歌を歌うほかに、巫女たちの礼儀作法と身の回りの世話だという。平成15年の佐喜浜八幡宮の御神幸(なおばれ)の記録としてイチについて書かれている。この時の神歌は福田徳代さんの歌うカセットテープに録音された音源によるものだという。福田さんは昭和46年に亡くなった最後のイチである。今に伝わるイチの話であるが、神歌を司る子神子の顔に化粧をする「イチ」には「化粧田として田地一反」が給されるという。地検帳にみられる県下の「侘給」の田の面積をみると、一反に満たないものが多い。

『長宗我部地検帳』の刊本の一部には侘(イツ)でなく僣と誤植したものもある。また、ホノギに「イチヤシキ 侘ゐ」とあることから、当時はイツがイチに転訛し呼ばれていたものと考えるが、どちらが正解であるかは不明である。刊本全部をみてみたが「侘ヤシキ」「イチノミコやしき」といったホノギや「侘給」「惣侘」「権侘給」「一宮侘給」「八幡侘給」などの給地が県下100カ所近くみられる。

高知県下に市野々が2つあり、そのふたつとも付近に市野瀬の地名もあわせもつ不思議な関係にある。黒潮町市野瀬は四万十町と黒潮町の境に座する修験の山・五在所ノ峯の南麓にあたる集落で、いっぽうの土佐清水市下ノ加江の市野瀬集落は土佐の延喜式社・二十二座のひとつ・伊豆田神社のふもとにある集落である。この市野瀬川の少し下流の支流が市野々川で、2つの地形図を見比べてみると不思議さがよくわかる。中世以来の地名であり、巫女の一形態である土佐の「侘（いつ）」との関連性をおおす地名である。またこの「イチ・ノノ」のノノについては、先述の「田野々」のノノと同じである。

もう一つの不思議な縁に、上山郷の熊野神社には「湛増の大蛇退治」の昔ばなしがある。湛増の姫が大蛇に連れ去られ、その大蛇を菖蒲作の神剣で退治した話。その伝説の地である権現下の洞穴ウログチには社宝である大蛇の角の一部を分かち祀った大蛇塚の碑がある。この昔ばなしには続きがある。姿が鱗のある蛇体となった姫は、伊与喜郷の市野瀬にあるアサナベトドロの淵に身を投げ白蛇となって住んでいるという。

もっと不思議なのは、熊野那智大社のお膝元の集落が市野々であることだ。

【道中記】地蔵峠から尾根道を降り付く途中に開墾された石垣のあとがみえる。山中の平坦地まで生産の手を伸ばすご先祖様は偉いと感じる。今は猪の格好のえさ場であり辻場となっている。ここからは里も近いと暗示するように道も急坂となりつづら折れから獣道との区別が分からなくなる。少し迷ったがそのまま藪



こきしたら舗装の道にでた。ここが市野々の上流域だ。ほっとしたまま足を進めると人家がぼつりぼつりとみえてくる。道端の墓には「打井」と刻まれている。河内神社前で人に出くわしたので「打井川から来るには伊与喜川と市野々川とどちらがいいか」と尋ねたら、この道（市野々）がいいとのことだった。「わたしらあも若いころは道文さん（奥打井川に鎮座する道文神社）へお参りに行ったもんじゃ」と語った。（11：20/20.8km）

▼ 不破原（ふばはら/33.108789, 133.102262）

『長宗我部地検帳』に「符場原村」とでてくる。『角川日本地名大辞典』は「はばら（小石まじりの地質）」「ふばら」「ふば（封端）」「はらい（禊を行う場所）」の転訛としつつ、「付場」であれば川舟や筏の付場を意味するという。また18世紀後半の谷真潮の『西浦廻見日記』にある「座頭を送る労役“フ（夫）の賃八錢”ハ（八）を支払う“ハラ（払う）”ことが村名」と村老のいうことも引用している。徳弘勝も『土佐の地名』（1984年）で、この谷真潮の説を引用している。岡村憲治は『西南の地名』（1981年）

で角川日本地名大辞典の“はばら”の転訛の説により石地の原野と説明する。

吉田茂樹の『日本地名語源辞典』（新人物往来社、1981年）にはフワ（不破）について「美濃国不破郡がみえ、関ヶ原町周辺の古名で、上古に不破の関が置かれた所。“フハ（封端）”」の意で、東国に向かう端の地を封ずる関のあることを示す地名」と述べる。四万十市の不破は四万十川以西への遠流となる端であり、ここ不破原はもうすぐ高岡郡の境となる東の端に位置する。

地形図を読んでも穿入蛇行する川筋は谷真潮が述べるように陰難な道であるとともに幡多と別れ高岡へ向かう東端の首根っこにあたる。ここは「封端（フハ）」と理解したい。

【道中記】市野々川は何も悪いことをしているわけではないが、市野々川地区に佐賀発電所があるのでここを通ると心がざわつく。1989年「津賀ダム撤去運動」、98年から2001年にかけての「家地川ダム撤去運動」と2度のダム撤去運動があった。その系譜を話せば長くなるので地物の命名についてだけ書くことにする。四国電力に照会したのは「ダム湖に沈む集落名をダム（堰堤）に刻まないで、導水路の先にある発電所の所在する地名をダム（堰堤）の名称とするのか」ということである。四国電力の正式な名称は津賀ダムであり佐賀堰堤であるが、ダム所在の住民は古味野々ダムであり、家地川ダムである。モノの命名については愛情のある命名法をルール化していただきたい。この発電所を過ぎるとすぐに国道56号線に出合う。ここが不破原だ。出合から一つカーブを曲がれば伊与喜となる。（11：47/22.6km）

▼ 熊居（くまい/33.102228, 133.098904）

伊与喜郷の熊野神社が鎮座するところが熊井である。江戸時代の『南路志』に「夫れ（熊野浦）より西の方五十町はかりに鎮座なし奉る、故に其所をさして熊居村と云」（三巻p349）と熊井の地名由来を示している。それ以前の『長宗我部地検帳』には「熊井村」とある。熊居は熊野別当湛増が居を構え熊野神社を勧請したと言いたいのだろうか名づけに無理がある。桂井和雄は高知市の久万、春野町弘岡下の久万、中土佐町大野見の久万秋などを挙げ川沿いの平地の称としている。また、片岡雅文は『土佐地名往来』で南路志や地元の伝承を紹介し「熊野の神の居ますところ」と呼ばれそれが転じて熊井となったと説明する。

熊野のクマ（隈）は、奥まった所、辺鄙な所の意味の他、クマ（曲）の意味する河川の湾曲部分も考えられる。地形図で見れば一目瞭然、伊与木川が熊井で大きく屈曲していることがよくわかる。もう一つ考えられるのが「供米田（くまいでん）」である。中世、神仏にお供えするための米を耕作する田である。仏供田が寺院で、神田が神社の儀式等の費用に充てる米耕作ならば、供米田は神仏習合の熊野神社に充てる田なのかもしれない。

グーグルマップで「熊居」を検索すると、新潟県阿賀野市熊居新田がヒットした。この大字は新潟平野の東南に位置する 35 h a の開発新田が広がり中央に熊野社が鎮座しその周辺だけに人家がまとまる。この景観は、この地の熊井の由来に似ている。また和歌山県有田川町熊井もあるが、『角川日本地名大辞典』をみても熊野神社とは関係がないようだ。

【道中記】不破原から伊与木川に沿って伊与喜に向かう。ややこしいことに、地名は「伊与喜」、住民の姓は「伊与木」で、村名は「伊与木」、郷名は「伊与喜」、大字名は「伊与喜」となる。川は本流が「伊与木川」で小谷の「伊与喜川」がここで合流する。小学校や J R 駅は「伊与喜」となっている。伊与喜駅の西側に流れる伊与木川に架かる橋は「伊与喜橋」と複雑でどう読んでもイイヨである。そうこうすると、熊井の熊野神社下に辿りつく。神社は何度も来たので下から手を合わせる。前回、佐賀越の古道調査に来たときに鍛冶屋跡を訪ねた。熊井から遍路道でもある熊井トンネルを抜けようと思ったら工事のため通行不可とある。予定の昼食は道の駅「なぶら土佐佐賀」の塩タタキと決めていたが藤縄まわりで先延ばしとなった。上分の白石集落に来ると高速道路の工事で美田の半分も埋まっている。中角集落の中を真っすぐ通り抜けると道の駅だ。30 分の昼食休憩を取る。（道の駅/13：07/25.8 k m）

▼ 佐賀・熊乃屋（さが・くまのや/33.079429, 133.104215)

『佐賀町農民史』（1983 年）に慶長 2 年（1597）と昭和 57 年（1982）の佐賀（下分・町分・浜分）の地図が掲載されている。慶長の地図と地検帳によると仲野々村のカチワラというホノギに弘瀬源左衛門（同書の地図番号 26）が住んでいた。昭和 57 年の地図に合わせてみると熊乃屋旅館がそこにあたるようだ。仲野々村（61 戸）、明神浜村（30 戸）、安森村（9 戸）、大和田村（2 戸）と村名が示され、柳原、堂免、横枕、大町、弓場の本、上灘村の地名も見える。



熊乃屋旅館は、清浄人が潮汲みの祭事で立ち寄るところである。旅館は閉ざされているが今でも潮汲みした竹筒を旅館の軒先に吊るしている。熊乃屋を営んでいたのが山本友明さんで、その先祖が田辺湛増にお供してきたという。熊乃屋はその昔錦屋と称して庄屋や通送の仕事をしていたと思われる佐賀町農民史には記してある。清浄人は熊乃屋で一泊して御接待を受け、帰路に着いたとのことだ。その返礼なのか、秋の祭礼には熊乃屋まで迎えが来ていたとのことだが、今はもうない。

【道中記】3 度目の熊乃屋となった。国道が開通するまでは、この熊乃屋の前の

通りが中心的な商店街であったことをうかがわせる古い看板が並ぶ。今回は歩いての訪問だから、街角のおばさんの会話や昼時の料理の匂いも五感で知ることができる。海のない大正の人は佐賀が一番近い海。小学校の遠足は必ず佐賀の海岸へと行った。砂浜で遊び、先生は遠くの海を指し「地球は丸いろうが」と気張って説明してくれた。家族でニナを獲りにきたのも佐賀の海岸だ。港に向けて足を進めると海の荒い匂いがだんだんと増してくる。熊乃屋の近くに柘耕の魚屋があるからだ。佐賀を通るときには必ず寄って魚やカツオのたたきを買ったものだった。向いの郵便局はここがかつて街の中心であったことを主張している。この先の交差点にあるガソリンスタンドを過ぎると住宅街とお店が混在する新しい町となる。漁師町の狭い山際のへりをつづら折れに路地を進むと「会所」の表示があった。碁会所のイメージから推理すると身分に関係なく何かを楽しむ空間のように思えるし、路地裏の井戸端会議の周りで子どものはしゃぐ声がする広場にも思える。地区・部落という村落共同体を常会ということから常会の集まる所＝会所で、いまの集会所を指すものかもしれない。ただ、会所という姓も佐賀にはあるということで集会所だけでは説明がつかない。この先の切り通しは「野田の坂」。昔、大津波が押し寄せたとき野田不動尊の前でピタッと止まったという。ノタクルは猪などの動物が田畑を荒らしてめちゃくちゃにする様子をいう。ノタは大津波の記憶を刻んだ地名かもしれない。そう考えながら右手に墓を見ながら切り通しを抜けると海となる。白砂が広がり鹿島も見える。(熊乃屋/13：20/26.8km)

▼ 熊野浦 (くまのうら/33.100496,133.142667)

『民俗地名語彙辞典』はクマについて、水の曲流している地形(曲)、水に臨んだ丘陵の端。中国以西では久万または隈と書く。対馬では山麓から峰へ続く高み(稜線)をいうと述べ山岳重疊の中に大河の蛇行する強い景観的対照が、熊野や南九州(球磨川)の景観要素を構成する所にこの地名が見えるところ。これら地形地名のクマを構成する地名の他に、熊野神社の勧請による伝播地名としての「熊野」もある。福岡県筑後市大字熊野には熊野神社と上原々熊野神社があり、すぐ近くに熊野宮、熊野神社、久富熊野神社がある。半径2km四方に6社もあることになる。熊野神社の火祭「鬼の修正会」や久富の熊野神社の「盆綱引き」など伝統行事があるので是非訪ねてみたい。また広島県庄原市西城町熊野の熊野神社はイザナミが眠る比婆山を遥拝する神社。境内には大杉が林立し参道はそれをよけながらのつづら折れ。越知・横倉山の杉原神社に雰囲気似ておりここも訪ねたいところである。出雲にも熊野大社があり、いわばもう一つの熊野でもある。熊野社が全国に3千社あるのだから伝播地名としての熊野は多いことだろう。

この地の熊野浦の由来は「熊野別当田辺湛増が漂着した地」として名付けられたと伝

えられている。同じ熊野浦の地名は二か所あるが、三重県紀宝町の熊野浦は熊野三山のお膝元、鹿児島県中種子町の熊野浦は種子島家第10代島主種子島幡時公の勧請という。

慶長の地検帳には「熊浦村」とあるがクマノ・ウラなのかクマ・ノ・ウラなのかは判別できない。地名の命名で多く見られるのが連体修飾語の「ノ」である。クマ（隈・曲・熊）＋の＋浦ということになる。いつしかクマとノが一体となり、田辺湛増伝承にのって「熊野」となったのかもしれない。というのも、『南路志』に記述される上山郷の熊野神社と熊井の熊野神社の「応永17年（1410）・応永35年（1428）・享徳2年（1453）の3つの棟札」の記載内容の同一性である。両方とも勧請者は上山郷の領主が名乗る出羽左衛門の職官位と重正の名で勧請年も一致する棟札である。上山郷の出羽左衛門重正が双方とも勧請したように思えるが40年の間に3度も双方を同年に勧請することはあまりにも不自然である。これについて、これまで誰も検証を加えていないのも不思議である。田辺湛増の飛来伝説を物語にするには熊野浦と熊井と上山郷の熊野神社が三位一体となる必要があったのではないかと考える。

熊野浦には久保浦・西谷・東谷・境谷の四集落がある。南の豊かな日差しと潮風をうけた「熊野浦の温州ミカン」はここら界限のブランド品である。西谷では家の周りの急斜面にツワブキが栽培されている。

【道中記】塩屋ビーチと呼ばれる海岸線を歩くと数軒の塩づくりの小屋がある。小学校の修学旅行では坂出の塩田を見に行ったが今では跡形もない。こういったミネラルたっぷりの手作りの塩がブームとなっている。塩は生きるためになくてはならないもの。近年鹿の個体が増えた要因に、道路の凍結防止剤（塩化カルシウム）を放置していることにあるということだ。塩が山と海の交易、命をつなぐ出発点である。塩の次は熊野浦のミカン畑が続く。海岸沿いの道を徐々に高さを挙げながら進む。カーブの向こうに何があるかを楽しみに足を運ぶ。ほどなく熊野浦分岐となる。左に行けば鈴へも行ける県道中土佐佐賀線である。今も中土佐まで全通していない。青春時代は一部改良の鈴と熊野浦の間を「中央フリーウェイ」にみたて突っ走ったものだ。「片手で肩を抱いて愛してるって言ってもきこえない風が強くて この道はまるで滑走路夜空に続く」。今は歩くのが趣味というおじさんだ。熊野浦の西分に入った。温州ミカンを軽トラに積み込んでいた。黄色いコンテナには「渡辺鹿三」と書いてあった。白装束なので迷い遍路と思われるでもいいけないと思い「大正の熊野神社の潮汲み祭事の調査できた」というと、自分はここの熊野神社の総代で、大正の門脇清浄人を知っているという。色々話を伺った。佐賀や熊井へはこの西谷を上り詰めた山道で通ったとのこと。古い地図に「大和田への道」とあるから間違いなく清浄人も利用した潮汲みの古道だろう。振り向きながら何度もお礼をしているとすぐに熊野浦についた。そこには「武蔵坊弁慶の父 田邊湛増上陸の地」の説明板がある。来年又来る誓いをこめ

てこの度初めての般若心経を唱えた。 (14 : 35/32.6 k m)

【道中記 その2】日
を改めて1月3日に熊
野浦から山越の道を熊
井まで歩いた。潮汲み
の潮が差す時間を見計
らって午前10時に出
発した。西谷の山道を
通らずに東谷の車道を
県道中土佐佐賀線の出
合まで道端の人と話を
しながら足を進めた。



神戸からの移住者は都会と田舎の半々暮らしという。その上に住むおばさんに山道を訪ねたが「もうほうけてないぞね」と言われた。国土地理院の地形図頼みなので不安になった。県道中土佐佐賀線の出合まで歩くと遠くに五在所ノ峯が秀麗な姿を見せる。修験の山で有名だが、橘川からの山容が一番拝みたくなるくらい良い。出合から少し佐賀よりに進めば右側に作業道がある。地形図にある串山電波塔への取付道まできつと作業道が仕上がっているという期待で足を進めたらそのとおりだった。串山（サルゴシ山/308.5m）の電波塔には防災行政無線、各キャリア携帯局など林立している。ここからは地形図どおりの山道を進まなければならない。串山の「串」は越す意味で窪川の平串、十和の浦越の古名も平串である。稜線には往還道らしい道がある。いくぶん進むと石鎚神社の祠があった。そこから急に下がっていくが、手入れがされていないミカン園の入り乱れた作業道で先が怪しくなる。地図だよりも藪こき風になったが程なく広い開拓地跡のような小平地に出る。道もあり安心したがルートから外れてしまった。遠くに三宝山らしい携帯基地局がみえたので予定の道は諦めて熊井へ降りる道に変更した。小谷沿いに耕作されなくなった田が竹林に浸食されている。法泉寺もありその山上に熊井の熊野神社があるはずだ。伊与木川の氾濫にも影響されず、小谷の水利もよく南受けの田が並ぶ。ここが熊野神社の「供米田（くまいでん）」であると確信した。湛増伝説の「熊野別当湛増の居ます処」が熊居（熊井）の地名由来であるがこれを覆す勝手な推論である。（熊野浦～熊井/10：00～12：56/7.8km）